

JSWN

Japan Society of Women's Nephrologist

Japan Soc



# 第4回JSWN総会

(Japan Society of Women's Nephrologist)

## 日本女性腎臓病医の会

日時：平成18年6月24日(土)  
会場：パシフィコ横浜

特別講演

### 『腎研究の進歩』

～女性腎臓病医への期待を込めて～

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
内部環境医学講座 教授

日本腎臓学会 理事

下条 文武 先生



共催：JSWN(日本女性腎臓病医の会)  
中外製薬株式会社



新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学講座教授 下条文武先生

### ●はじめに

本日は日本女性腎臓病医の会にお招きいただき大変光栄です。人間というのはコミュニティに住む生き物です。このような女性による集まりも、女性が人間あるいは医師として生きるためには重要な役割を演ずるものと思います。私は日ごろ男女を意識することはありませんが、本日は少し視点を変えたお話をさせていただきたいと思っています。

### ●医療界・腎領域における女性

本日の講演にあたり、私のかかわる研究分野で活躍される女性を思い起こしてみました。私も参加する、アミロイド専門家による国際的な会がありますが、2年前この会がイタリアのピア大学で開かれました。その時、アミロイド蛋白の重合化などの研究で世界をリードするRadford氏が女性であると知り、改めて世界で活躍する女性ということを意識しました。

また、私の教室をみても、最近では毎年の入局者約10人中2～3人は女性が占めており、教室の在籍者全体では約20%を女性が占めています。現在教室は女性なくしては成り立たないといえます。

わが国全体では、総医師数約25万人のうち女性医師は約16%にあたる4万2040人です。最近では医学部卒業生の約34～35%が女性ですので、将来的にはさらにその比率が増えると考えられます。このような状況を受け、今後は全国的に女性医師が活躍するための根本的な環境整備の時代に入るべきではないかと思っています。

### ●女性腎臓病医に求められる研究・診療領域

つぎに、最近の腎研究の進歩をみながら、女性腎臓病医の活躍が期待される分野についてお話したいと思います(表①)。

#### CKD対策, 増加する透析患者対策

2005年末の集計では、わが国の透析患者は25万人を超すに至りました。医療界全体において腎疾患の重要性が高まるなか、近年chronic kidney disease (CKD) という新しい概念が登場しています。これは、慢性腎臓病を単に透析予備軍として重要視

するだけでなく、同時に心血管系合併症のリスクとして位置づけようとする考え方です。

2004年、Go ASらにより、CKDがcardiovascular disease (CVD) のリスクになるという報告が発表されました (Go AS *et al*: *N Engl J Med* 351:1296-1305, 2004)。またわが国からもCKDは心血管事故のリスクであるとする研究が発表され、CKDの重要性に対する認識が高まっています。さらに、欧米ではすでに、CKDは早期診断による早期介入が有効であることも明らかになってきています。

このようななか、女性腎臓病医に求められることとして、CKD対策、あるいは増加する透析患者への対策があげられます。ここに女性医師が果たす役割は非常に大きく、内科的疾患のなかでも慢性で付き合いの長いこれらの疾患の治療には、きめ細やかなケアという点で女性の特性が適しているのではないかとも思われます。

#### 糖尿病性腎症への研究参加

近年、糖尿病性腎症の研究では、*in vivo*で直接的に糸球体の血行動態を観察する方法が研究されています。新潟大学でも腎研究施設を中心に取り組んできました。

ラットを用いた実験では、FICTラベルの赤血球とFICTラベルのデキストランを注入し、実験装置で腎臓にレーザー光をあけると、その蛍光が糸球体を通して血行動態を観察することができます。

この方法で、ラットをコントロール群、STZ-糖尿病群、インスリン投与群、ARB投与群にわけて実験をおこなったところ、まず糖尿病群ではコントロール群にくらべ輸入細動脈、輸出細動脈のいずれも拡張しますが、輸入細動脈のほうがより高い比で拡張します。また糸球体容量も有意に糖尿病群のほうで大きくなります。一方、インスリン群とARB群では、糸球体容量はいずれも抑制されます。

表① 女性腎臓病医に求められること

- CKD対策, 糖尿病性腎症対策
- 増加する透析患者対策
- 腎疾患の病態解明への研究参加
  - IgA腎症の臨床遺伝学的解析
  - SNP解析, DNAマイクロアレイ
- "Professionalism"

血糖をコントロールすれば糸球体容量は変化しないのですが、注目すべきは、ARBを投与するだけでも改善することです。糖尿病性腎症対策としては血糖のコントロールと血圧のコントロールがともに等しく重要であることを裏づけたといえます。この研究の実施にあたっては、教室の女性大学院生の力が大きな役割を占めていました。このような手間がかかり根気を要する研究をつづけられるというのも女性ならではの強みではないかと思えます。

### 腎疾患の病態解明への研究参加

女性腎臓病医にその特性と力を発揮してほしい研究領域として、ゲノム医学の腎疾患への応用という分野もあげられます。当教室でも、SNPとDNAチップの腎疾患への応用などを中心として取り組んできました。

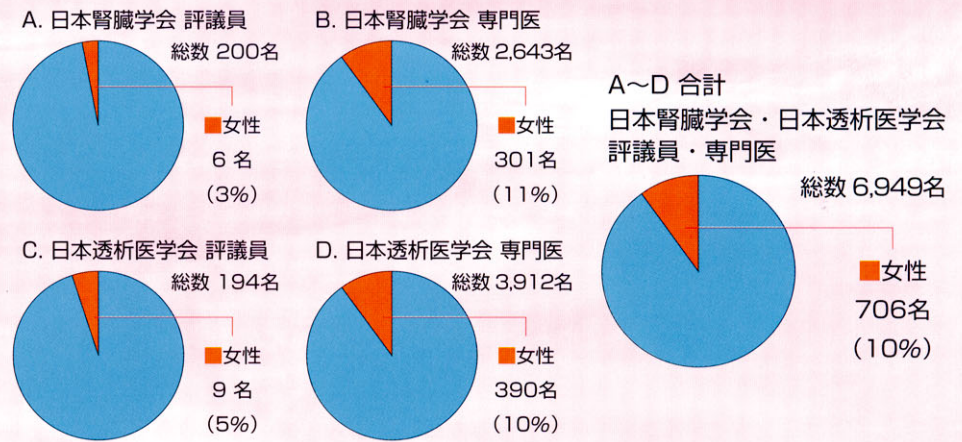
SNPに関しては、多くの遺伝子多型がIgA腎症の発症に関係しているということが明らかにされつつあります。現在私どもでは東大や女子医大なども共同し、100例単位の症例で明らかにできるfunctional candidateアプローチと、positional cloningに取り組んでいます。加えて、遺伝子多型と腎生検の障害度の研究についても、MCP-1の遺伝子多型がIgA腎症による腎障害に関係しているということを明らかにしましたが、この研究は自治医科大学から研究に参加された女性医師の森先生が担当しました。日本腎臓学会の論文賞を受賞しました(Mori H et al: *Clin Exp Nephrol* 9:297-303, 2005)。

今後のこれらの研究では、遺伝子多型をレトロスペクティブにみるのではなく、あらかじめ分析して前向き介入研究をおこなっていく必要があると思います。そしてこの面においても女性腎臓病医の皆さんの参加が必須です。

### ●女性医師の現在と未来

女性腎臓病医の診療・研究の現状において、現在当科においては女性医師の活動、活躍が不可欠であり、女性医師が活躍できる場・環境の整備が必要であると考えます。また、その活躍が適切に評価されることが必要であるといえます。次代の腎臓医療の道を切り開く研究に参加し、わが国の腎研究をリードしていただきたいと思えます。

今後の課題として、女性医師が結婚や出産の後に復職しやすくするなど、医療機関で女性が働きやすくなるための環境整備が



図① 日本腎臓学会・日本透析医学会の評議員・専門医における女性医師の割合

必要です。病院内での保育園の設置やその保育時間の延長など、改善しなければならない点が多々あると考えられます。

また、近年女性のキャリアアップに関して、女性の“チャレンジ指数”というものが用いられます。数字というのは社会を説得するのに有効なものですので、社会に働きかけるときには数的根拠を用いるのがよいと思います。数字ということで、日本腎臓学会と日本透析医学会の評議員および専門医に女性医師が占める割合をみてみますと、両学会とも、専門医に女性が占める割合よりも評議員に占める割合のほうが低いという結果でした(個人集計, 図①)。役員・評議員も専門医と同じ程度の割合を女性が占めてもよいのではないかと思います。先程言いましたように、数字をもって働きかける方法がよいと思います。

### ●女性腎臓病医の活躍に期待して

現在私たち医師には、患者本位の医療、安全な医療など、社会からさまざまな要求がなされています。また社会は医療に対して厳しい目を向けております。ではこのようななかで女性医師に求められているものは何でしょうか。女性腎臓病医はどこにアイデンティティを持つべきでしょうか。女性に限らず、今私たち医師に求められているものは何かといった場合、私はそれは“プロフェッショナルイズム”ではないかと思えます(表①)。専門性という“プロフェッショナルイズム”があってはじめて社会から高く尊敬されます。女性医師もこの“プロフェッショナルイズム”を追求することが評価につながるものと思っています。

女性医師には家事や育児をしながら勤めている方も多いと思います。さまざまな苦勞もあると思いますが、努力するものは報われる時代であると信じています。逆境であっても頑張してほしいと思っています。

最後になりますが、本会の一層の発展と皆さんの更なるご活躍を祈念して本講演を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

## 第4回 JSWN 特別講演に寄せて

JSWN代表  
虎の門病院 原茂子先生

JSWN(Japan Society of Women's Nephrologist)の会が、発足を含めて今年で4年目を迎えます。発足の経緯は、川口良人先生および『臨牀透析』編集部の方々のご尽力で、『臨牀透析』にトピックスとして掲載されています。この会を温かく見守ってくださっている多くの腎臓病医の先生方、関係団体のご支援と、メンバーの活動意欲によるものです。

それにもまして毎回特別講演をお引き受けいただいております先生方からの、熱いメッセージによるパワーにより、また来年もと期待をふくらますことができます。

第4回(世話人:湯村和子先生)は、日本腎臓学会理事長の下条文武先生にお願い申し上げました。女性腎臓病医を前に何を話せばいいのだろうか、引き受けられたあとからも、悩まれたのではと思っておりました。

しかしながら、まさにタイムリーな講演の内容で、参加者一同感銘を受けました。増加する女性医師の現状、医師不足のなかでの女性腎臓病医の活用、働くための社会環境の整備までと、日本腎臓学会、大学および腎臓病学教室などを統括されるお立場からその取り組みを述べられました。

ライフワークとされているアミロイドーシスの世界研究の場において、女性の研究者がleaderであること、日本の医学部のなかで先駆けて非常勤の女性腎臓病医の雇用体系確立により、腎臓病研究者とともに臨床医の育成を進められていること、研究室の業績にかかわる女性腎臓病医の仕事を紹介

され、最後にプロフェッショナルを目指すことの重要性を強調されました。

新潟大学における雇用体系が、全国の医学部や国公立病院でも広げられれば、仕事と家庭の両立のなかでも、女性の医師が継続して研究また臨床能力を大きく伸ばすことが可能であると思われました。このような機会を最大限に生かしてプロフェッショナルリズムを追及するとともに、女性腎臓病医の地位をより向上させることなど、女性腎臓病医に課せられた今後の責務であると痛感しました。

日本腎臓学会の新理事長の菱田明先生が、学会のプロジェクトのひとつとして腎臓学会での女性腎臓病医の復職プログラムや男女共同参画などを企画されています。そのときに、研究・臨床における能力、指導力、広い見識と行動力など、女性腎臓病医の真価が問われるのではないのでしょうか。このような環境作りは、女性医師のみならず、男性腎臓病医の環境改善にもつながり、ひいては、腎臓病学への寄与にもかわるものと期待されます。

昨今の医師不足の一因が、女性医師増加によるといった見解もみられておりますが、医学部女子学生に枠の制限などといった、時代錯誤的発想が今後出てこないためにも、女性腎臓病医の活躍に期待をこめたいと思います。

### JSWN活動内容

#### 1) 特別講演講師

第1回目 高階国際クリニック副院長 瀧野敏子先生(世話人:武曾恵理先生)

第2回目 厚生労働省医政局指導課医療計画推進指導員 北島智子先生(世話人:坂井瑠実先生)

第3回目 九州大学病院病院長 水田祥代先生(世話人:片渕律子先生)

#### 2) 原茂子, 武曾恵理, 坂井瑠実, 北島智子, 川口良人:トピックス Japan Society of Women's Nephrologist (JSWN).

臨牀透析 21:1405-1410, 2005



中外製薬株式会社



ロシュグループ